慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス研究開発ラボラトリ

Report of 2013

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開　設：2012 年 3 月 1 日
代表者：小松 浩子（看護医療学部教授）
関連 Web Site：http://www.kri.sfc.keio.ac.jp/japanese/laboratory/nursing.html
連絡先：慶應義塾大学看護医療学部小松研究室

本ラボラトリは、最善の看護実践 (ベストプラクティス) に不可欠である、（1）看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、（2）個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、（3）当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。

■メンバー

小松　浩子　看護医療学部教授：ラボラトリ・リーダー、がん看護実践質保証研究開発
太田喜久子　看護医療学部長・教授：高齢者看護実践研究開発
野末　聖香　看護医療学部教授：精神看護実践研究開発
武田　祐子　看護医療学部教授：遺伝看護実践研究開発
宮脇美保子　看護医療学部教授：倫理的看護実践研究開発・ベストプラクティス先導ナース開発研究
小池　智子　看護医療学部准教授：ベストプラクティス先導ナース開発研究
新藤　悦子　看護医療学部准教授：がん看護実践質保証研究開発
茶園　美香　看護医療学部准教授：患者、家族のセルフケア研究開発
森田　夏実　看護医療学部准教授：患者、家族のセルフケア研究開発・ベストプラクティス先導ナース開発研究
藤井千枝子　看護医療学部准教授：看護技術研究開発
福田　紀子　看護医療学部専任講師：精神看護実践研究開発
朴　　順禮　看護医療学部専任講師：ベストプラクティス先導ナース開発研究
中村　幸代　看護医療学部専任講師：母性・助産学実践研究開発
石井美智子　看護医療学部助教：精神看護実践研究開発
矢ヶ崎　香　看護医療学部助教：がん看護実践質保証研究開発
稲見　　薫　看護医療学部助教：がん看護実践質保証研究開発・遺伝看護実践研究開発
中尾真由美　看護医療学部助教：がん看護実践質保証研究開発
仙波　美幸　看護医療学部助教：がん看護実践質保証研究開発
高畑　和恵　看護医療学部助教：遺伝看護実践研究開発
平野　蘭子　看護医療学部助教：看護技術研究開発
関　　美佐　看護医療学部助教：看護技術研究開発

目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることにも力を注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、＜安心と安全＞が保証され、＜医療に対する納得と満足＞が得られ、＜当事者の価値が尊重＞され、＜充実した生活や生き方＞ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボラトリは、最善の看護実践 (ベストプラクティス) に不可欠である、（1）看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、（1）個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、（3）当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。この目的のために、＜看護実践の質保証研究開発＞＜ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発＞＜倫理的看護実践のためのシステム構築＞の３つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボラトリの主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボラトリの根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者の QOL の向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、＜医療イノベータ＞の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探求する。

研究活動計画の概要

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

1）がん関連倦怠感に対する心理的バリア尺度の日本語版開発
2）経口抗がん薬治療に関するケアの開発
3）上部消化管術後障害をもつがん患者の活力と QOL 向上をめざすリハビリテーション開発
4）乳がん患者の化学療法誘発性認知機能障害に対するヨガを用いた活性化プログラムの開発

小松　浩子　慶應義塾大学看護医療学部　教授
矢ヶ崎　香　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

がん患者への最善のケア提供を目指して、新たな看護実践の開発、活動を推進する。

1）がん関連倦怠感に対する心理的バリア尺度の日本語版開発
2）経口抗がん薬治療を受ける患者のアドヒアランスに関するケアの開発
3）上部消化管術後障害をもつがん患者の活力と QOL 向上を目指してプログラムを開発
4）化学療法誘発性認知機能障害に対するヨガを用いた活性化プログラムの開発

B. 計画および実施過程

1）外来通院を行っている乳がん患者を対象に、がんに関連倦怠感に対する心理的バリア尺度 (Fatigue Barrier Scale) の日本語版を作成し、妥当性、信頼性を検証する。

2）－1 経口抗がん剤治療の患者と看護の実態に関する全国調査の実施
2012 年 -2013 年の間にアンケートによる全国調査を実施し、看護の実態を明らかにする。

2）－2　経口抗がん剤治療を受ける胃癌患者へ面接調査を実施し、体験を明らかにする。

3）リハビリテーション（STEP）プログラムの feasibility study および機能回復，活力向上，QOL 向上への効果を検証する。

4）乳がん患者の化学療法誘発性認知機能障害に対するヨガを用いた活性化プログラムの開発と Feasibility study の実施

C. 目標達成状況

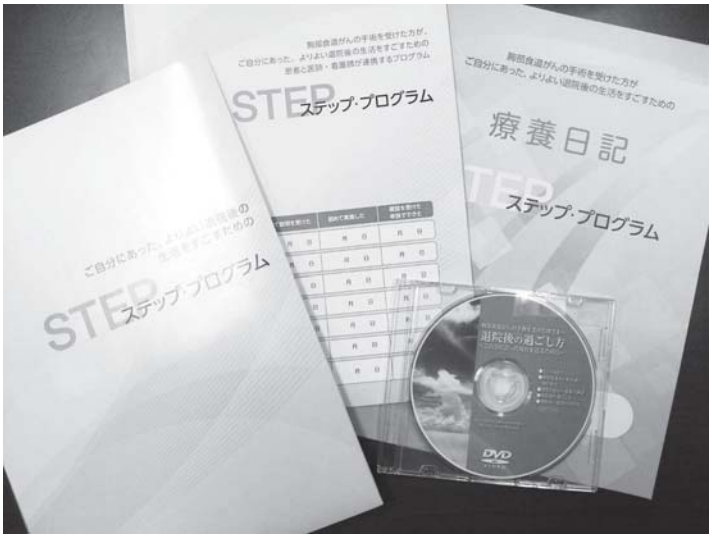
1．研究実践活動

1）Fatigue Barrier Scale の日本語版を開発し、結果は論文（International Journal of Palliative Nursing,2013）により報告した。

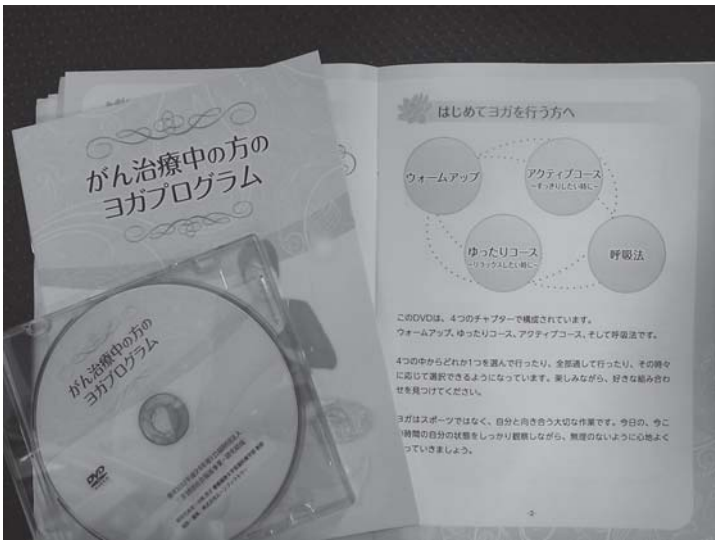
2）－1　経口抗がん剤治療の患者と看護の実態に関する全国調査を実施した。現在、投稿中である。

3）－2　経口抗がん剤治療を受ける胃がん患者を対象にした質的研究を実施した。現在、論文作成中である。

3）上部消化管術後障害をもつがん患者を対象にした STEP プログラムを開発した。現在、STEP プログラムに関する feasibility study を実施中である。



4）ヨガを用いた活性化プログラムを開発した。現在 Feasibility study を進めている。



2．今後の課題、展望

現在進行中の研究の継続と論文投稿まで進める予定である。

5）広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者への支援に関する研究

小松　浩子　慶應義塾大学看護医療学部　教授
矢ヶ崎　香　慶應義塾大学看護医療学部　助教
稲見　　薫　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

病院・大学共同研究グループの活動として、広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者への支援に関する研究を進め、看護実践の開発、改善を目指した。

B. 計画および実施過程

① メンバー:（看護医療学部）小松浩子、稲見薫、矢ヶ崎香、（2-3 病棟）片岡美樹、野池綾子、鄭栄姫、小林幸、荊尾歩、秋山沙央里、粟野由恵、（外来）矢崎久妙子、勝又徳子、高橋一寿子、江原明子、（婦人科）田中京子、青木大輔 (敬称略)

② 昨年度までの研究の結果を看護実践へ還元するためにケアツールを作成するために広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者のケアニーズに対応する医療者の課題を抽出し、解決に向けた新しいケアプログラムの要素を抽出、構造化すること。さらに、その結果に基づきケアプログラム（ケア媒体）の開発を計画した。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者に対する支援方法の検討

婦人科（腫瘍班）・産科（不妊・妊娠・周産期）・小児科（新生児期）医師、婦人科・産科・小児科看護師、助産師を含めたグループでフォーカスインタビュー実施し、質的研究を行った。この結果も踏まえてケアツールを作成した。

2）学会発表

第 28 回日本がん看護学会で「広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者に対する支援方法の検討」口頭発表を行った。

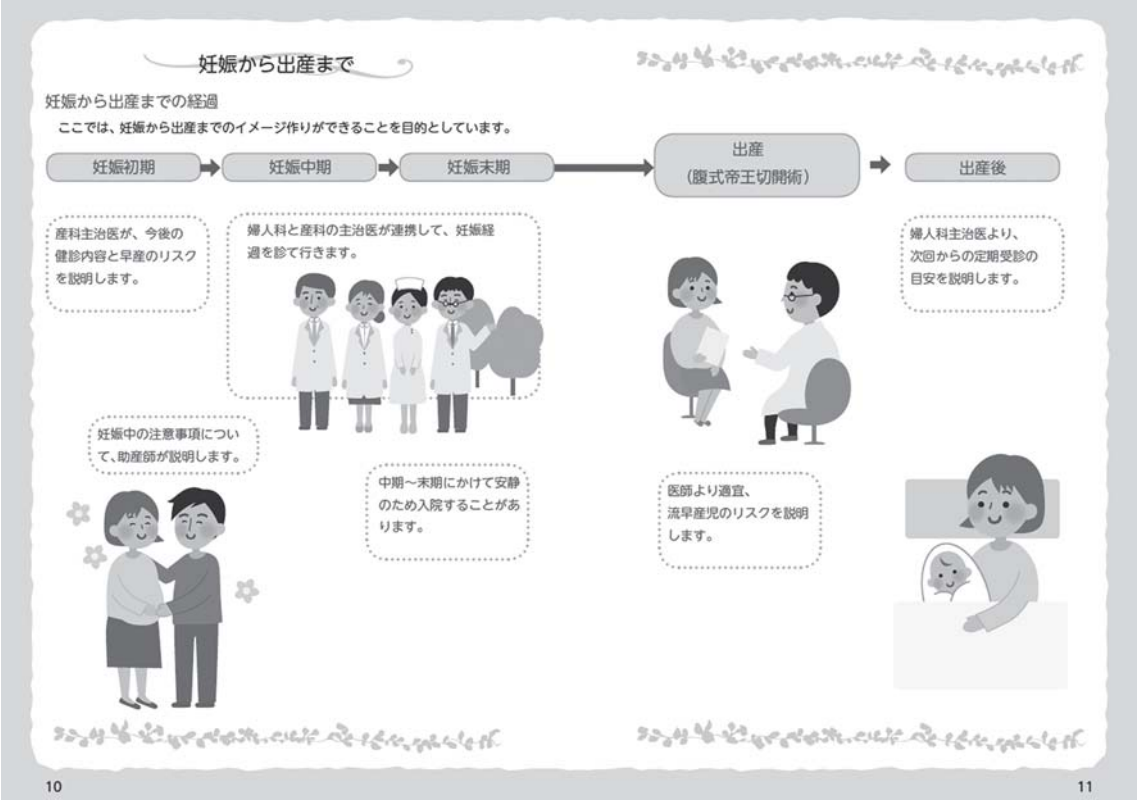
2．今後の課題、展望

開発した患者に対するケアツールを臨床へ適用し、有効性の評価を行う。

3．2013 年度の業績

1. Komatsu H, Yagasaki K, The Power of Nursing: Guiding Patients through a Journey of Uncertainty, European Journal of Oncology Nursing.2014. in press.
2. Komatsu H, Watanabe C, Yagasaki K, Sakakibara N, Nakamura S. Validation of the Japanese version of the Fatigue Barriers Scale (JFBS). International Journal of Palliative Nursing, 2013, 19(10), 503-509.

3. 飯野京子 , 綿貫成明 , 小山友里江 ,(略) 矢ヶ崎香 , 小松浩子 . 上部消化管術後障害に伴うがん患者の症状・徴候― 文献レビューによる発症状況の分析―. Palliative Care Research 2013; 8(2): 701-20.
4. Yagasaki K, Komatsu H. The need for a nursing presence in oral chemotherapy. Clinical journal of oncology nursing, 2013, 17(5), 512-516.
5. Yagasaki K, Komatsu H. Communication across cancer boundaries, Journal of Nursing Education and Practice, 2013, 3(10).
6. 飯野京子 , 綿貫成明 , 小山友里江 ,(略) 矢ヶ崎香 , 小松浩子 . 胸部食道がん術後患者の退院後の生活における困難の実態 Palliative Care Research(in press)
7. IIoka Y, Komatsu H. Effectiveness of a Stress Management Program to Enhance Perimenopausal Women's Ability to Cope with Stress, Japan. Journal of Nursing Science. 2013. in press.



遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究

武田 祐子　慶應義塾大学看護医療学部臨床看護　教授
稲見　　薫　慶應義塾大学看護医療学部臨床看護　助教
高畑 和恵　慶應義塾大学看護医療学部臨床看護　助教

A. 目標

遺伝性腫瘍患者・家族に対して、適切な医療の活用によるがん死の回避と、ＱＯＬ向上に寄与する看護支援を開発し、提供のための基盤を構築する。

B. 計画および実施過程

1）適切な遺伝医療を提供するためのケアネットワークモデルの構築
2）遺伝サポートグループと看護者との協働方略の構築
3）遺伝性腫瘍家系の長期的支援のためのシステム開発に関する研究

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

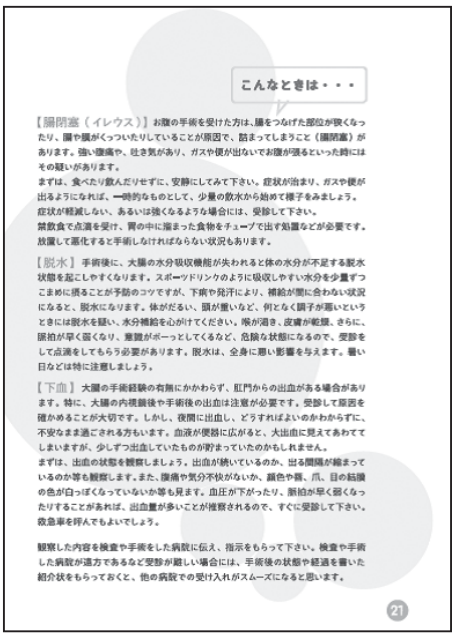
1）　適切な遺伝医療を提供するためのケアネットワークモデルの構築

遺伝医療に携わる医療者との情報交換、ネットワーク作りのため、関連学会の学術集会を活用した企画を開催・参加した。

・「他職種による遺伝子診療を考える会」第 19 回日本家族性腫瘍学会学術集会（7 月大分）
・「仲間の活動を知ってケアのヒントをみつけよう」日本遺伝看護学会第 12 回学術大会（9 月岩手）
・「SIG 交流フォーラム：遺伝がん看護グループ」第 28 回日本がん看護学会学術集会（2014.2 月新潟）活動紹介『がんの遺伝を臨床にいかす』

2）遺伝サポートグループと看護者との協働方略の構築

昨年度作成した「家族性大腸腺腫症ハンドブック」を遺伝サポートグループである「ハーモニー・ライフ（家族性大腸腺腫症患者・家族・支援者の会）」に配布して意見をもらうと共に、定期的集会で話題となる日常生活上の困難としての「腸閉塞」「脱水」「下血」について、その機序と対処について内容を追加し、改訂版を発行した。（図 1　参照）


こんなときは・・・

【腸閉塞（イレウス）】お腹の手術を受けた方は、腸をつなげた部位が狭くなったり、腸や膜がくっついたりしていることが原因で、詰まってしまうこと（腸閉塞）があります。強い腹痛や、吐き気があり、ガスや便が出ないでお腹が張るといった時にはその疑いがあります。
まずは、食べたり飲んだりせずに、安静にしてみて下さい。症状が治まり、ガスや便が出るようになれば、一時的なものとして、少量の飲水から始めて様子をみましょう。
症状が軽減しない、あるいは強くなるような場合には、受診して下さい。
禁飲食で点滴を受け、胃の中に溜まった食物をチューブで出す処置などが必要です。放置して悪化すると手術しなければならない状況もあります。

【脱水】手術後に、大腸の水分吸収機能が失われると体の水分が不足する脱水状態を起こしやすくなります。スポーツドリンクのように吸収しやすい水分を少量ずつこまめに摂ることが予防のコツですが、下痢や発汗により、補給が間に合わない状況になると、脱水になります。体がだるい、頭が重いなど、何となく調子が悪いというときには脱水を疑い、水分補給を心がけてください。喉が渇き、皮膚が乾燥、さらに、尿量が早く弱くなり、意識がボーっとしてくるなど、危険な状態になるので、受診をして点滴をしてもらう必要があります。脱水は、全身に悪い影響を与えます。暑い日などは特に注意しましょう。

【下血】大腸の手術経験の有無にかかわらず、肛門からの出血がある場合があります。特に、大腸の内視鏡後や手術後の出血は注意が必要です。受診して原因を確かめることが大切です。しかし、夜間に出血し、どうすればよいのかわからずに、不安なまま過ごされる方もいます。血液が便器に広がると、大出血に見えてあわててしまいますが、少しずつ出血していたものが貯まっていたのかもしれません。
まずは、出血の状態を観察しましょう。出血が続いているのか、出る間隔が縮まっているのか等も観察します。また、腹痛や気分不快がないか、顔色や唇、爪、目の結膜の色が白っぽくなっていないか等も見ます。血圧が下がったり、脈拍が早く弱くなったりすることがあれば、出血量が多いことが推察されるので、すぐに受診して下さい。救急車を呼んでもよいでしょう。

観察した内容を検査や手術をした病院に伝え、指示をもらって下さい。検査や手術した病院が遠方であるなど受診が難しい場合には、手術後の状態や経過を書いた紹介状をもらっておくと、他の病院での受け入れがスムーズになると思います。

21

図 1．家族性大腸腺腫症
ハンドブック追加内容

ハーモニー・ライフ、国立がんセンターの医療者との協働で「家族性大腸腺腫症セミナー」（2014.2 国立がんセンター）を開催した。（図３　参照）

３）遺伝性腫瘍家系の長期的支援のためのシステム開発に関する研究

専門外来における看護記録による受診者の動向把握を行い、課題について検討した。

がんプロフェッショナル養成基盤推進プランの一環として、「遺伝性腫瘍に対する医療」に関するセミナー（2014.1 月）を開催し、遺伝性腫瘍に対する大学病院での取り組みと各診療科における考え方を共有し、意見交換する機会を得た。
（図２．４参照）

図 2. がんプロセミナー

４）本ラボの合同企画である第４回看護ベストプラクティスフォーラム『ケアの創出：がんになってからの生き方』において、『がんの遺伝を知り、生き方を継承する』をテーマにこれまでの活動を紹介した。（図５参照）

図 3. 家族性大腸腺腫症セミナー

図 4. がんプロセミナー

図 5. 看護ベストプラクティスフォーラム

２．今後の課題、展望

・サポートグループと協働で取り組んできている医療費負担に関する課題に対して、３年間にわたる医療費の実態調査をまとめ、資料として提示する。
・外来受診者のその後の状況と遺伝カウンセリングの影響についての調査、および、がん発症に関わる健康管理行動に影響する要因探索について研究を行う。

３．2013 年度の業績

1. 稲見薫、武田祐子 . 家族性大腸腺腫症患者のライフイベントに関する調査 . 家族性腫瘍 ,2013,13(2),39-43
2. 武田祐子．病気論―遺伝・先天性―, 井上智子編集・監修 , 看護治療学の基本 ,140-155, ライフサポート社 ,2013（横浜）
3. 武田祐子．遺伝外来（がん）. 数間恵子編 , 外来看護パーフェクトガイド ,100-108, 看護の科学社 ,2013（東京）

うつ傾向改善のためのケア・プロトコールを用いた精神看護専門看護師の介入評価

（平成 22 ～ 24 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B)「患者・家族を対象とした精神看護介入のニーズ分析とプロトコール開発」の研究の一部を、看護ベストプラクティスラボに登録したものである。）

野末　聖香　慶應義塾大学看護医療学部　教授
福田　紀子　慶應義塾大学看護医療学部　講師
石井美智子　慶應義塾大学看護医療学部　助教
宇佐美しおり　熊本大学大学院生命科学研究部　教授
安藤　幸子　神戸市看護大学　教授
上野　恭子　順天堂大学医療看護学部　准教授

A. 目標

がん患者の QOL 向上のためには、うつ傾向を早期に発見し、早期に適切な治療やケアを提供することが重要であり、精神看護専門看護師にはケア提供者としての役割が期待されている。そこで、本研究では、患者のうつ傾向を早期にとらえ、改善するためのケア・プロトコールを作成し、プロトコールに基づいたケアを実施し、その結果を分析することにより、効果的なケア方法を開発することを目的とした。

B. 計画および実施過程

1. 研究の概要

1）研究デザイン：ランダム化比較試験

2）対象者：化学療法を目的として入院している肺がん、血液がんの患者で、調査対象施設は 3 施設である。

3）介入：ケア・プロトコールを用いた精神看護専門看護師による介入。

介入群に実施するケア・プロトコールは、支持的精神療法、心理教育の理論をベースに、研究者らによる先行研究、身体疾患でうつを合併した患者へのケアガイドラインを参考にして介入内容、方法、介入時期や期間を検討し、本研究用に研究者らが作成した。精神看護専門看護師により対象者へ 4 回の面接介入を行った。

対照群への介入として心理教育パンフレット (写真 1) を作成し、対象者へ手渡した。介入期間は原則 2 週間とした。

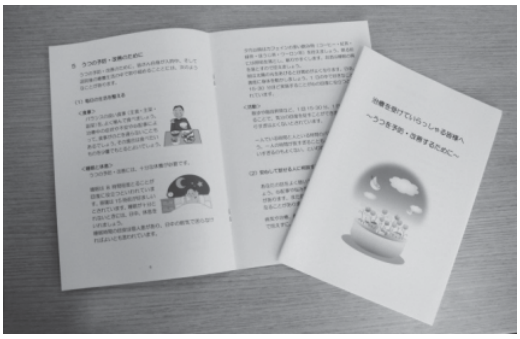


写真 1 ：心理教育パンフレット

4）アウトカム評価の指標：「うつ状態」、「QOL」、「患者満足度」
調査用紙は①基礎情報、② PHQ-9、③ HADS、④ SF-8™（アキュート版）、⑤ CSQ-8J であり、介入開始時と、介入終了後の 2 時点で測定した。

5）倫理審査：慶應義塾大学看護医療学部研究倫理委員会、および調査施設の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

2．実施状況

1）前年度 30 であったデータ収集を継続し、介入研究を実施した。

2）今年度合計 74 名の介入に達し、有効データ数 71 でデータ収集を終えた。

3）現在データ分析を実施中である。

C. 目標達成状況と今後の課題

1．研究実践活動

前年度課題であったデータ数は介入継続により 71 まで増やすことができ、データ収集を終了出来た。

2．今後の課題、展望

介入結果に関する分析を進め、ケア効果を評価する。さらに、ケア・プロトコールの評価を行い、実践するにあたり課題や汎用性について検討を行う。本研究をまとめたものを、学会等での発表し、投稿していく予定である。

3．2013 年度の業績

学会発表（口演）：

宇佐美しおり，野末聖香，福田紀子，石井美智子，安藤幸子，上野恭子（2013）．中等度の抑うつ・不安を有する身体疾患患者への CNS 介入の評価．第 33 回日本看護科学学会学術集会（大阪）．

宇佐美しおり，野末聖香，安藤幸子，上野恭子，福田紀子，石井美智子（2013）．統合失調症患者の幻聴に対する精神看護専門看護師による行動マネジメントプログラムの評価に関する研究．第 33 回日本看護科学学会学術集会（大阪）．

シンポジウム発表 (写真 2,3)：

野末聖香:「心の健康を保ち、自分らしく生きよう」．看護ベストプラクティスフォーラム，ケアの創出：がんになってからの生き方．SFC Open Research Forum（東京），2013.11.23.

写真 2：シンポジウム

写真 3：シンポジウム

高齢社会における災害時と日常時をつなぐ看護実践の知の蓄積と効果的な支援方法の開発

太田 喜久子　慶應義塾大学看護医療学部　学部長

A.　目標

1．　現代の高齢社会における災害支援に関わる看護実践の実際から実践の内容と方法、課題についての情報を幅広く収集する。

2．　災害時と日常時の看護実践を関連づけ、災害予防、災害発症時、再生に関わる効果的な支援方略を明らかにする。

B. 計画および実施過程

1．看護系各学会との連携、意見交換、交流から、各学会の活動実績を通し、災害支援に関わる情報を集約する。

2．これまでの知見を踏まえ、看護学、老年看護学の立場から、災害看護実践の知の蓄積と、課題、今後の方向性について社会に発信する。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

① 日本老年看護学会災害支援検討委員会委員長として日本老年看護学会第 18 回学術集会においてワークショップ「老年看護領域における災害支援の検討：東日本大震災後の福島県の被災と現状より」を開催した。その成果を日本老年看護学会誌で報告した。

② 日本老年看護学会災害支援検討委員会において、災害時高齢者支援マニュアルの検討、ならびに災害時の援助者支援ガイド、援助者向け研修プログラムの内容と方法の検討を行った。

③ 日本学術会議東日本大震災復興支援委員会　災害に強いまちづくり分科会において宮城県、岩手県の復興の現状と課題について現地調査を実施した。

④ 日本学術会議東日本大震災復興支援委員会　災害に強いまちづくり分科会と、環境政策・環境計画分科会の合同提言「いのちを育む安全な沿岸域の形成に向けた海岸林の再生に関する提言（案）」を作成、公表に向け検討した。

２．今後の課題、展望

- 災害時における高齢者支援方法を多角的に検討し、マニュアルを作成する。
- 災害時の援助者支援方法の検討、看護師を中心とした援助者向け研修プログラムを作成し、研修を試行し、評価を行い、継続的実施方法について検討する。
- 日本学術会議東日本大震災復興支援委員会　災害に強いまちづくり分科会における提言案を作成していく。
- 本部門活動の目標、活動計画について検討する。
- 疾患をもった高齢者の日常生活機能の維持と、早期自宅復帰に向けた多職種による働きかけの実態と課題を明らかにし、効果的方法を検討する。

３．2013 年度の業績

[文献]

- 増谷順子 , 太田喜久子 . 軽度・中等度認知症高齢者に対する園芸活動プログラムの有効性の検討 . 人間・植物関係学会雑誌 , 13 (1). 1-7.

- 吉田和樹，大塚眞理子，丸山　優，太田喜久子，小野幸子，桑田美代子，千田睦美，六角僚子，湯浅美千代 . ワークショップ「老年看護領域における災害支援の検討」，老年看護学，18(1)，33-39.

- 大内尉義編集主幹，太田喜久子他、老年医学系統講座テキスト，老年看護への理解と連携を，西村書店，2013,10-12.

[招聘講演]

- Kikuko Ota. Nursing care for elderly people with dementia in the aging society of Japan, 3rd World Academy of Nursing Science，18th　October,2013,Korea.

サスティナビリティの高い妊婦セルフケアプログラム「冷え症改善パック」の有効性　ランダム化比較試験による検証

中村　幸代　慶應義塾大学看護医療学部　専任講師

A. 目標

2014 年度のデータ収集にむけての準備ができる。

1. 文献検討・HP の作成
2. プログラム開発
3. アウトカム測定用具の検討・準備
4. 研究方法の具体化

B. 計画および実施過程

1. 文献検討・HP の作成

研究公開サイトを作成した。　http://plaza.umin.ac.jp/hiesho/index.html

2. プログラム開発

具体的なプログラム (案) を計画した。

① 衣類：レッグウォーマの着用の有無

② 運動：妊婦のための冷えとりｴｸｻｻｲｽﾞ 0 ～ 3 回

③ ツボ押し：湧泉 1 分間押す

上記について具体的なプログラムを開発し、内容妥当性の検討やサスティナビリティの高い方法論の検討を行う。

- 介入群（プログラム実施群）：103 名、
- 対照群（普通に生活群）：103 名　　＊ 1 か月実施後評価する。

3. アウトカム測定用具の検討・準備

（1） サーモグラフィー（1 台）の購入と使用準備

赤外線サーモグラフィ FLIR E8　6,499,950 円 (税込)

トレーサビリティー：3 万円

アズビルトレーディング株式会社 http://at.azbil.com/mt/product/control/flir/

（2） プログラム実施管理専用アプリケーションの開発話し合い開始 (1 月～)

- 点数が出る、合計点が出る
- グラフ化できる
- インターネットを通じて、リマインドしたい（1 週間／）無理なら 1 週間ごと

4. 研究方法の具体化

研究デザイン：RCT

5. 倫理審査委員会に申請準備と申請

C. 目標達成状況

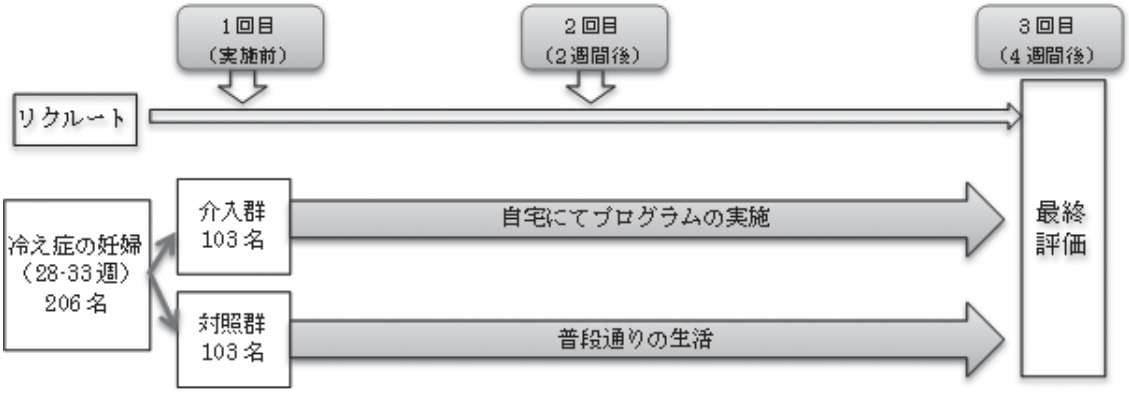
1．研究実践活動

現在、本研究の基盤となる、先行研究の投稿を行っている。また、日本助産師会の研修会等でエビデンスに基づく冷え症の講演を実施している。

また、慶應義塾大学 SFC OPEN RESEARCH FORUM にてポスター発表を実施した。

2．今後の課題、展望

■　今後の研究計画



2014 年度の調査にむけて、準備を進めていく。調査協力者への依頼や、調査協力施設の協力状況が円滑に進むかが課題である。

■　2014 年度の取り組む具体的な準備

- 質問紙の作成
- エクササイズの開発とイラスト化
- 冷え症改善パックハンドブック、アプリの開発
- 倫理審査委員会への申請と承認
- 施設への依頼

3．2013 年度の業績　（ジャーナル公表論文のみ記載）

- Sachiyo Nakamura、Shigeko Horiuchi：Relationship Between Advanced Maternal Age, Hiesho (Sensitivity to Cold) and Abnormal Delivery in Japan.　Open Nurs J. 2013; 7: 142-148.　doi: 10.2174/1874434601307010142
- 中村幸代，堀内成子．妊婦の冷え症と異常分娩との関係性，日本助産学会誌 2013，27(1),94-99.
- 中村幸代，堀内成子，柳井晴夫．妊婦の冷え症と微弱陣痛・遷延分娩との因果効果の推定―傾向スコアによる交絡因子の調整―，日本看護科学会誌 2013，33(4)，1-10

外来でエンドレスな治療を受ける再発大腸がん患者の「生を繋いでいく力」支援仕組み構築

新藤　悦子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A. 目標

進行再発大腸がんの治療は進歩し患者に延命をもたらしている。一方、進行再発大腸がん患者が持つ身体的心理的社会的問題に特化した研究は少なく、また患者からのアピールも少ないためにどのような支援ニーズを持っているのか明確ではない。

本研究は、長期化学療法中の再発大腸がん患者の心理社会的問題に関わる療養体験を明らかにし、当事者と医療者でつくる支援のありかたを考える。

B. 計画および実施過程

1) 研究組織：茶園美香（看護医療学部准教授）、小松浩子（看護医療学部教授）
岡林剛史、鶴田雅士（慶應義塾大学医学部助教）

2) 平成 25 年度は以下の研究活動を行った。

(1)　4 ～ 9 月慶應義塾大学看護医療学部 (受理番号 208)・医学部研究倫理審査 (承認番号 2013-192) を受け承認された。

(2)　6 月国際サポーティブケア学会において 23 年度からの成果を発表し、国内外の研究者との情報交換、意見交換を行う。

(3)　9 月～ 3 月当事者へのインタビューを実施。

(4)　11 月～調査分析。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1) 当事者たちの心理社会的問題に関わる療養体験を明らかにする

化学療法中の進行再発大腸がん患者の心理社会的問題に関わる経験について調査を継続中である。データは各参加者約 60 分～ 80 分の半構成的面接法によって収集し、その語られた経験を解釈し分析中である。

参加者は早期発見、早期受診の行動が取れなかったことを昨日のことのようにリアルに語り、それが進行再発がんとなってしまった後悔として語られた。転移したがんに対する治療を続けることでしか生き続けることができない事実に日々直面しつつ、治療継続中の「日替わり」の副作用、症状の日常生活のへの影響、病気悪化への不安など様々な苦痛に苦慮しながらも、「気にしない」と自分自身に言い聞かせる形で対処していた。

「金の切れ目が命の切れ目」となりかねないことを常に意識しつつ、家族による手厚いサポートを受けていたが、気持ちの詳細は言葉にしない様にしていた。

2) 国際サポーティブケア学会 (ドイツ /2013 年 6 月 27 日～ 29 日開催) への参加・発表

23 年度からの成果を発表した。世界 77 か国約 1300 名が参加した。がんサポーティブケアは症状・合併症コントロール、リハビリテーション、ＱＯＬ，サバイバーシップ，社会心理的問題、緩和ケア等多岐にわたった。進行再発大腸がん患者の経験、心理社会的支援に関する文献検討結果を発表した。進行再発大腸がん患者の生存期間の延長に比して、日本に限らず研究が少ない現状を報告し、参加者と共有しあえた。

2．今後の課題、展望

今後さらに事例を収集し、分析を重ねて社会心理的な問題の在りようの理解を深め、支援の在り方を検討していく。臨床の方の協力得て当事者サポートのための活動の可能性について検討する。

3．2013 年度の業績

・E. Shindo, M. Chaen, N. Yamagishi, H. Komatsu.Current status and challenges of building a support system for patients with recurrent colorectal cancer using a psychosocial support program. 2013 International MASCC Symposium Supportive Care in Cancer. 2013.6, Berlin, Germany

・E. Shindo. Treatment Experience of Survivors with Recurrent Colorectal Cancer Based on Interviews. 2013 International MASCC Symposium Supportive Care in Cancer. 2013.6, Berlin, Germany

化学療法を受けているがん患者に対する運動プログラムの構築に関する研究

茶園美香　新藤悦子、森田夏実　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
小林　正弘　慶應義塾大学看護医療学部　教授
仙波　美幸　慶應義塾大学看護医療学部　助教
片岡　美樹　慶應義塾大学病院　師長
野池　綾子　慶應義塾大学病院　主任
辻　　哲也　慶應義塾大学医学部　准教授
福島　卓矢　慶應義塾大学医学部大学院生

A. 目標

がん患者用セルフケア型運動プログラムの実施を継続するための、看護師の介入による効果、及び化学療法中のがん患者が運動を実施することに対する患者及び看護師の認識を明らかにし、臨床の場で実行する事の可能性を検討する。

B. 計画および実施過程

1) 介入研究：①化学療法中の婦人科がん患者対象に「がん患者用セルフケア型運動プログラム」を 3 ヶ月間実施、②患者入院時に看護師による面接の実施。
2) 質問紙調査：化学療法中のがん患者の運動支援に対する看護師、患者の認識
3) 慶應義塾大学医学部研究倫理審査の承認（2013 － 209）を得て実施。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1) 現在までの研究参加者は 20 名で、介入を継続中である。
2) 介入開始前の化学療法中患者への運動支援に対する看護師の認識調査に看護師 14 名回答した。

2．今後の課題、展望

運動プログラムによる介入を 3 月で終了し、看護師に対して運動支援に対する認識と、患者への面接についての調査を実施する。その後データを分析し、臨床における運動プログラム実施への提言を行う。

3．2013 年度の業績

- M.Chaen, E.Shindo, N.Morita, N.Yamagishi, M.Kobayashi :Effect of exercise program for patients with gynecological cancer undergoing chemotherapy, 2013 International MASCC Symposium Supportive Care in Cancer,2013. 6，Berlin Germany
- 茶園美香、新藤悦子、小林正弘、山岸直子、森田夏実：化学療法中のがん患者に対する体操の効果、第 18 回日本緩和医療学会学術大会、2013. 6　横浜
- 茶園美香：「がん化学療法中の生活の質の向上：運動と共に」看護ベストプラクティスフォーラム、ケアの創出：がんになってからの生き方、SFC Open Research Forum, 2013,11 東京

子育て中のがん患者が子どもに病気を伝えるための看護支援プログラムの構築

茶園美香、新藤悦子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
仙波　美幸　慶應義塾大学看護医療学部　助教
鎮目美代子　慶應義塾大学病院看護部長
近藤咲子、片岡美樹　慶應義塾大学病院　師長
北川　雄光　慶應義塾大学外科学　教授　腫瘍センター長
高石　官均　慶應義塾大学医学部　腫瘍センター　准教授
竹内　麻里　慶應義塾大学病院　助教

A. 目標

子育て中のがん患者が、子ども（18 歳未満）に病気を説明することを支えるための啓発活動を行い、説明した後の親と子どもを支援するためのチームを作る。

B. 計画および実施過程

1. 慶應義塾大学病院に勤務する医療者を対象にした講演会・講座の開催
2. 慶應義塾大学病院に「がんの親と子どもサポートチーム（仮称）」を設立

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1) 講演会・講座の開催：

① 講演会「子育て中のがん患者が子どもに病気を伝えることを支援するために」：参加者 44 名。参加者は、がんの親の気持ちや子どもの気持ちを理解し、今後の臨床で身近にできる援助方法を学んだ。

② 医療者・医系学生を対象とした講演会「親ががんであることを子どもに伝え・支える」：参加者 53 名。参加者は子どもの変化、子どもに親の病気を伝える意味や伝え方を学び、伝えた後の子どもをサポートする意思を表した。

③ 「日本版 CLIMB® プログラムボランティア講座」で、親ががんであることを説明された子どもとその親をサポートするプログラムを学ぶ。2015 年 3 月 15 日に開催予定。

2) 「がんの親と子どもサポートチーム（仮称）」は、病院職員（看護師、医師、ケースワーカ）と教員、医系学生で構成し、多職種連携によるチーム活動を開始した。

2．今後の課題、展望

①「日本版 CLIMB® プログラム」を 2 回 / 年行う。 ②医療者、患者・家族への啓発活動。

3．2013 年度の業績

- 茶園美香：子どもに伝えることを支援するための看護師の役割、がん看護 18(4),463-467，2013
- 近藤咲子：終末期における患者の子どもに病気について説明したケース　大学病院の事例 (終末期になってもできること)、がん看護 18(5),565-568，2013

ホルモン療法中乳がん患者の倦怠感マネジメントのバリアと生活の質に関する研究

中尾　真由美　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

ホルモン療法中の乳がん患者の倦怠感マネジメントのバリア（患者・医療者が倦怠感を評価し対処することの妨げとなるような患者の信念や態度、知識）と倦怠感、生活の質との関連を明らかにし、患者の生活の質の維持・向上のために有効な倦怠感マネジメントの介入方法を開発する基礎資料とする。

B. 計画および実施過程

2014 年 2 月 7 日　第 28 回日本がん看護学会学術集会にて発表
2014 年　専門誌への投稿

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

都内総合病院乳腺外来で実施したホルモン療法中の乳がん患者 138 名への質問紙調査結果から、
①倦怠感マネジメントのバリア、倦怠感、生活の質の関連、
②倦怠感有症率と倦怠感に関連する因子、
③倦怠感マネジメントのバリアに関連する因子を検討した。

ホルモン療法中乳がん患者の生活の質には、不安・抑うつ傾向、バリア、倦怠感、診断からの期間が有意に関連した。倦怠感有症率は、0-10（0: 倦怠感なし、10：想像できる限り最悪の倦怠感）の数値的倦怠感尺度（Fatigue Numeric Scale：FNS）で、89% が 0 ではない倦怠感を報告し、36.9％が 4-10（中等度以上）の倦怠感を報告した。Cancer Fatigue Scale では、生活に支障をきたす倦怠感と判定されるカットオフポイント 19 点以上と回答した人が 47.8% であった。倦怠感には、不安・抑うつ傾向とバリアが有意に関連した。約半数の患者が「倦怠感を訴えたら治療を変えられるかもしれない」「倦怠感は避けられない」「倦怠感が重要なら医療者から話題にするだろう」「私の倦怠感のことで主治医を煩わせたくない」といったバリアを有し、バリアには、不安・抑うつ傾向、同居者の有無が有意に関連した。

これらの結果から、バリアを取り除くような教育的・心理社会的介入の必要性が示唆された。

2．今後の課題、展望

・　今回の結果に基づき、倦怠感マネジメントのバリアを取り除くような教育的・心理社会的介入方法を開発していく。

3．2013 年度の業績

・　中尾真由美、小松浩子、山内英子、金井久子、矢形寛、吉田敦、林直輝、
ホルモン療法を受けている乳がん患者の倦怠感マネジメントのバリアと生活の質に関する研究、第 28 回日本がん看護学会学術集会、2014 年 2 月 7 日、第 28 回日本がん看護学会学術集会抄録集 136 頁
・小松浩子、青柳秀昭、中尾真由美、矢ヶ崎香、キャンサーサバイバーシップ　治療と職業生活の両立に向けたがん拠点病院における介入モデルの検討と医療経済などを用いたアウトカム評価～働き盛りのがん対策の一助として～身体的要因の解明と対策、厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）総合・分担研究報告書

看護技術研究開発

藤井千枝子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
平野　蘭子　慶應義塾大学看護医療学部　助教
関　　美佐　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

基礎看護技術教育に有用な教材の作成、及び効果的な活用に向けた基礎研究の遂行を目標とする。

B. 計画および実施過程

看護技術は、最善の根拠を知識として蓄えるとともに、それぞれの身体を活かして習得していく。初めて学ぶ看護技術の印象は強く、正確な質のよい情報を提示することが重要となる。我々は、基盤となる力を高めるための教育方法の構築が必要と考えきた。本年度までに、手技の分析や、教育方法の検討を重ねている。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

新人看護師の協力のもと、教育介入前後の手技の変化を分析し、教材開発を進めた（藤井）。また、看護師はどのように採血を経験してきたか等の調査結果を考察した（藤井、平野、関）。

2．今後の課題、展望

看護技術教育の教材開発に取り組んでいく。

3．2013 年度の業績

Chieko Fujii (2014). Comparison of skill in novice nurses before and after venipuncture simulation practice. Journal of Nursing Education and Practice 4(5) 16-22.

Quality Improvement を担う 先導ナースの養成プログラムの開発・検証

小池　智子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A．目標

本部門は、最適なケアと患者のアウトカムを達成するために、チームやユニットでケアの質保証システムを稼働し、これを先導する看護リーダーの育成プログラムを開発し実証することを目指している。

2013 年度は、前年度の課題を踏まえ、以下の 2 つのプログラムを再設計し、実施した。

1．組織開発（Organization Development）の一環に位置づけ、Quality Improvement を効果的にすすめるマネジメント・サイクル実践プログラム
2．ケース・メソッドを用いたマネジメント能力を育成する学習プログラム

B．計画および実施過程

1．マネジメント・サイクル実践プログラム

1）2013 年度プログラムの特徴とねらい

部分的な職場問題の解決に焦点をあてたプログラムを見直し、再設計した。改定プログラムは、アクション・リサーチやシステム理論を含めた行動科学の知見や手法を基盤に、ヒューマニスティックな価値観に基づき、組織の効果性を高めることを目標としている。組織内のプロセスや組織文化などの人的要因を含む組織の諸次元に対して、協働的な関係性を通して働きかけていく、計画的、長期的、体系的な実践プログラムとなるようにした。

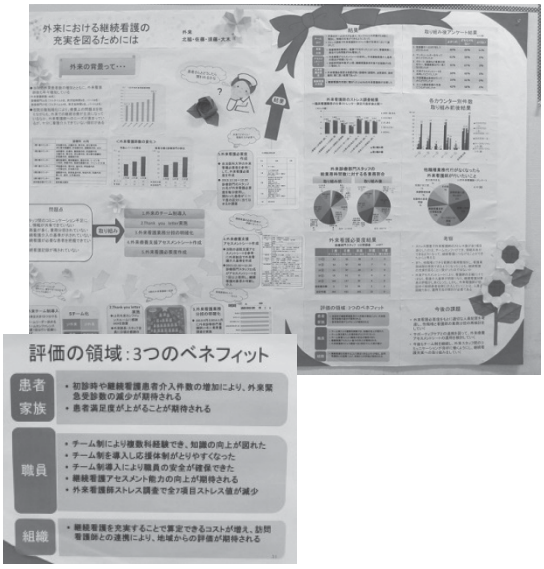
2）計画および実施・評価

（1）基盤となる理論・技術の整理：システムのレベル毎にプログラムの基盤となる理論と技術を整理した。本プログラムに用いる主要な手法は以下の通りである。

・各レベル共通：　アクション・リサーチ、アクション・ラーニング
・個人レベル：パーソナル・コーチング
・グループレベル：　チーム・ビルディング、プロセス・コンサルテーション
・グループ間・全体レベル：ホールシステム・アプローチ

（2）実施：プログラムは、①協働的な関係性の形成を促進するため、チーム・ビルディング、コミュニケーション・スキル等をグプロセスの見える化を基盤におき、②問題解決のためアクション・リサーチ（問題の設定、調査、分析とフィードバック、目標設定、アクション計画と実施、評価）の手法に則ったプログラムを設計した。通年で実施する医療機関には、研究者がコンサルテーション（4 日間：導入・中間・最終）を行った。

（3）評価：2013 年度に通年で取り組み評価したのは、2 医療機関 29 部署である。①の協同的な関係性の形成はほぼ全ての部署が目標水準を達成し、また②の問題解決も設定した目標を 8 割～部分的に達成していた。また、実施した取り組みの約 6 割が部署内で、また 2 件が病院内での標準化が検討されている。



なお、本プログラムの導入セッションは、認定看護管理者教育課程（ファーストレベル）4 課程で、実施している。

2．ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム

1）2013 年度プログラムの特徴とねらい

教育手法としてケース･メソッドを用い､参加者が現実事例（ケース）をシミュレーション（模擬経験）することで、判断や決定の力を高められるよう設計している。

2）計画および実施・評価

ケース・メソッドは、用いるケースの質とファシリテーションがカギとなる。

2013 年度は、新たに「チーム医療」と「診療報酬をテコにした職場改善」をテーマとしたケースを 2 つ作成した。本ケースは、地域の中核病院（急性期）の看護部長等へのインタビューに基づいて作成している。

認定看護管理者教育課程（セカンドレベル）4 課程で実施した。実施期間が 1 日であるため、参加者の判断力等の変化は評価できないが、他の教育手法によるケース検討と比べ、問題設定・解決策の根拠が明確であり、管理者教育として効果があることが示唆された。

C．次年度への課題

次年度は 2 つの改定プログラムの効果を、測定し個人レベル・組織レベル毎に評価する。

【本研究部門に関連した実績】

1. 小池智子、大島敏子、鈴木恵子他：チーム医療の診療報酬上の評価とその活，第 17 回日本看護管理学会学術集会、インフォメーションエクスチェン、2013/8.
2. 小池智子：「ケース・メソッド」とはなにか、（管理的思考の育成：ケース・メソッド入門 第 1 回）、看護展望 Vol.39 (4)、2014.
3. 小池智子、鈴木恵子、松浦正子他：看護のコアサービスを強化する、（管理的思考の育成：ケース・メソッド入門 第 2 回）看護展望 Vol.39 (5)、2014.

ヒヤリ・ハット事例に学ぶ

今さら聞けない！臨床看護のエビデンスの WEB 配信

森田　夏実　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A. 目標

・看護師向け Web サイトを維持し、臨床看護師への普及をはかる。
・ユーザーアクセスの評価を行い、次年度に向けた課題を明らかにする。

B. 計画および実施過程

1．研究組織：森田夏実 (慶應義塾大学)、福家幸子、宗村美江子（虎の門病院）、内匠屋隆（コニカミノルタエムジー株式会社）、粟本安津子（(株) メディカ出版）

2．実施過程：

パソコンやモバイル端末からフリーでアクセス出来る看護師 / 看護学生向け情報サイト Nurse.cloud は 2012 年 8 月にコニカミノルタエムジー株式会社が開設、運営している。コンテンツは実際のヒヤリ・ハット報告を基に現場での頻度等を勘案して事例を作成し、臨床看護のエビデンスを学べるよう、①事例、②考えられる原因、③適切な対処法、④知っておきたい看護技術、⑤プリセプター・指導者へのワンポイントアドバイス、によって構成されている。さらに、図説◆臨床看護医学デジタル版（有料）をひもづけ、医学的、看護学的知識を深められるようにした。2 週間毎に新しい事例を web に掲載している。一般ユーザーは事例を自由に閲覧でき、会員登録（無料）すると、事例解説が閲覧できる。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

2014 年 2 月末の掲載事例数は 40 件で、全てが検索可能になっている。2013 年 3 月末の会員は 148 名だったが、2013 年 11 月時点では、769 名（看護師 72%、学生 22% 等、）となった。急増の原因として、学生向けのサイト等への広告やリンク、事例の他に医療機器に関連する情報「コノミの部屋」の掲載などの努力が実を結んだと考えられる。図説閲覧権のある有料会員は 8 名で、有料会員のニードについては検討を要する。不特定多数への情報提供の効果については、会員数、ページ訪問数、滞在時間などアクセス状況を調査した。

訪問数の多かった事例は、「乳がん術後のドレナージ～ SB バックの吸引圧低下（第 4 回）」、「J－VAC* のシリコンドレーンをクランプし、放置してしまった（第 21 回）」、「脳室ドレーンからのオーバードレナージ（第 8 回）」、「輸液ポンプに上下逆にルートをセットしていた（第 12 回）」、「認知症患者さんの点滴の自己抜去を防ぐには？（第 18 回）」、「点滴の滴下数調整間違い（第 6 回）」「CAG 後の採血で異常値が出たのはなぜ？（第 2 回）」、「相互作用のある薬剤を投与してしまった（第 11 回）」などで、点滴、ドレーンなどに関連するものが多かった。ユーザーが関連キーワードで検索する際、前述のような内容に関して当サイトが上位に出てくるのも一因かと考えられる。また、治療関連内容を調べたいというニーズが高いとも考えられる。

一方、「車いすブレーキのかけ忘れによる転倒（第9回）」、「肝性脳症患者さんの危険行動（第10回）」、「抗血小板薬服用中に、止血が不十分だった事例（第16回）」、「間違ったインスリン製剤を渡してしまった（第19回）」、「排泄時に硬膜外カテーテルが切れてしまった（第23回）」、「アンモニア採血前に補食してしまい、再採血となった（第29回）」、「イレウス管挿入中の患者さんがジュースを飲んでしまった！（第32回）」、「ダブルバッグ製剤の隔壁開通が不十分だった！（第30回）」など、看護ケア技術や医療処置的な、しかし、新人ナースに対して注意喚起が必要不可欠な事例へのアクセスは下位であった。これらの事例については、ユーザーが、インターネットで検索して知識を得て解決するような内容ではないかもしれないと示唆される。

2．今後の課題、展望

サイト利用者は、不特定多数のため、万人のニーズに応えられる事例を提供することには限界がある。

しかし、蓄積された事例を学生や院内での教育に活用するなど、今後は、サイトの積極的活用方法についても検討していく必要があると考える。また、現在は主として新人ナースが起こしたヒヤリ・ハット事例を掲載しているが、経験者の事例を基にしたコンテンツなども検討していきたいと考えている。

3．2013年度の業績

森田夏実、福家幸子、宗村美江子、ヒヤリ・ハット事例に学ぶ今さら聞けない！臨床看護のエビデンス：会員によるWebコンテンツの評価、第17回日本看護管理学会学術集会発表、2013年8月25日（東京）

中堅看護師の倫理的苦悩と倫理的支援システムの構築

宮脇　美保子　慶應義塾大学看護医療学部　教授

A. 目標

・倫理コンサルテーションシステムの構築

1) 臨床看護師が経験している倫理的苦悩を質的研究により明らかにする。

2) 倫理的苦悩を抱えている看護師を支援するシステムを構築する。

・ケアリング文化の醸成

患者の立場にたった倫理的実践の実現に不可欠なケアリング文化を醸成する。

B. 計画および実施過程

・倫理コンサルテーションシステムの構築

テーマ :「中堅看護師の倫理的苦悩と倫理的支援システムの構築」

1) 前年度までに実施した看護師を対象にしたインタビューデータを質的に分析し、まとめた成果を学会 (Sigma Theta Tau International (STTI), Honor Society of Nursing, 42nd Biennial Convention, 16-20 November 2013、Indianapolis, USA) で発表する。

2) 執筆中の「看護実践のための倫理と責任」を 2013 年度内に出版する。

3) 倫理コンサルテーションに関する情報収集およびシンポジウムを実施する。

・ケアリング文化の醸成

医療機関、大学等での看護におけるケアリング環境の重要性について講演を行う。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

・倫理コンサルテーションシステムの構築

1) 医療機関、看護協会等での看護実践における倫理と支援のあり方について講演した。

2) 第 18 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会シンポジウム 1「高齢糖尿病患者への倫理的配慮」の symposist として登壇した。

3) STTI, Honor Society of Nursing, 42nd Biennial Convention で発表した。

4) 医療倫理関連学会における活動を通じて、倫理コンサルテーションシステム構築に向けての情報収集、情報交換を行った。

5) 2014 年 1 月に単著「看護実践のための倫理と責任」を中央法規より出版した。

6) レクチャーフォーラム「倫理的問題への対応～倫理コンサルテーション」を 2014 年 3 月 11 日に開催した。

2．今後の課題、展望

・倫理コンサルテーションシステムの構築

1) 研究の成果を論文として STTI に投稿予定である。

2) 次年度は、「正義の倫理」と「ケアの倫理」に関する研究を行う予定である。

3)「ケアの倫理－ネオリベラリズムへの反論」の著者であるファビエンヌ・ブルジェール (Fabienne Brugere, フランス・ボルドー・モンテーニュ大学・哲学教授) の来日に伴うセミナーに参加し、「ケアの倫理」についての意見交換を行う。

・ケアリング文化の醸成

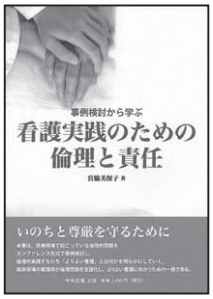
1) 医療機関、看護協会等で依頼されている講演および臨床看護師、患者との意見交換を予定している。

3．2013 年度の業績

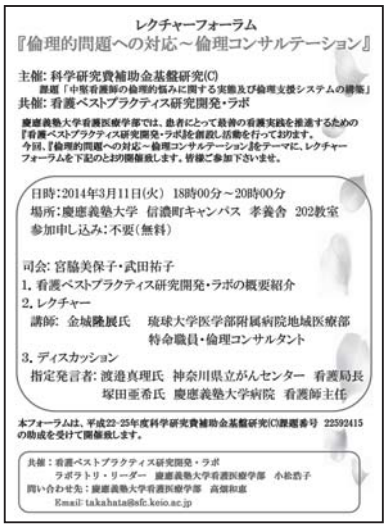
1. Mihoko Miyawaki, Ikuko Miyabayashi: Moral distress experienced by proficient nurses in Japan, Sigma Theta Tau International (STTI), 42nd Biennial Convention, November 16- 20 2013. Indianapolis.

2. 宮脇美保子 :「看護実践のための倫理と責任」、中央法規、2014

研究発表、Opening ceremony で旗手を務めました。



【いのちと尊厳を守るために】
本書は、医療現場で起こっている倫理的問題をカンファレンス形式で事例検討し、「よりよい看護」とは何かを明らかにしていく。臨床現場の看護師が直面する倫理問題を言語化し、よりよい看護に向かうための一冊。



レクチャーフォーラム
『倫理的問題への対応～倫理コンサルテーション』

主催: 科学研究費補助金基盤研究(C)
課題「中堅看護師の倫理的悩みに関する実態及び倫理支援システムの構築」
共催: 看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

慶應義塾大学看護医療学部では、患者にとって最善の看護実践を推進するための『看護ベストプラクティス研究開発・ラボ』を創設し活動を行っております。今回、『倫理的問題への対応～倫理コンサルテーション』をテーマに、レクチャーフォーラムを下記のとおり開催致します。皆様ご参加下さいませ。

日時:2014年3月11日(火) 18時00分～20時00分
場所:慶應義塾大学 信濃町キャンパス 孝養舎 202教室
参加申し込み:不要(無料)

司会: 宮脇美保子・武田祐子
1. 看護ベストプラクティス研究開発・ラボの概要紹介
2. レクチャー
講師: 金城隆展氏 琉球大学医学部附属病院地域医療部 特命職員・倫理コンサルタント
3. ディスカッション
指定発言者: 渡邉真理氏 神奈川県立がんセンター 看護局長
塚田亜希氏 慶應義塾大学病院 看護師主任

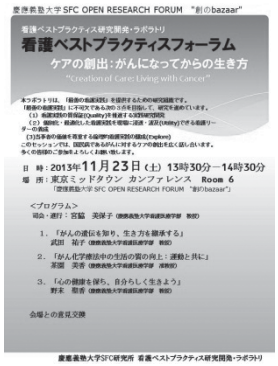
本フォーラムは、平成22-25年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 22592415 の助成を受けて開催致します。

共催:看護ベストプラクティス研究開発・ラボ
ラボラトリ・リーダー 慶應義塾大学看護医療学部 小松浩子
問い合わせ先:慶應義塾大学看護医療学部 高畑和恵
Email: takahata@sfc.keio.ac.jp

フォーラムの開催

本ラボでは、質の高い看護実践（ベストプラクティス）の重要性や課題、成果を広く社会に発信、啓発するために、定期的にフォーラムを開催し、看護職をはじめとした医療専門職、患者や市民の方と意見交換する機会としています。

第４回　看護ベストプラクティスフォーラム
『ケアの創出：がんになってからの生き方』



慶應義塾大学 SFC OPEN RESEARCH FORUM　“創の bazaar” においてフォーラムを開催し、研究や開発されたプログラム等の紹介を含め、国民病であるがんに対するケアの創出を広く話し合いました。また、展示会場にポスターを掲示し、本ラボを紹介しました。

日時：2013 年 11 月 23 日 (土）13 時 30 分― 14 時 30 分
場所：東京ミッドタウン カンファレンス　Room 6
プログラム：
　　司会・進行：宮脇　美保子
　　（慶應義塾大学看護医療学部　教授）

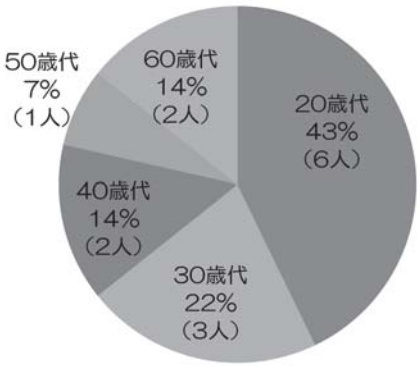
看護ベストプラクティス研究開発・ラボの概要紹介
倫理的看護実践のためのシステム構築　リーダー　宮脇　美保子

1．「がんの遺伝を知り、生き方を継承する」
　　武田　祐子（慶應義塾大学看護医療学部　教授）
2．「がん化学療法中の生活の質の向上：運動と共に」
　　茶園　美香（慶應義塾大学看護医療学部　准教授）
3．「心の健康を保ち、自分らしく生きよう」
　　野末　聖香（慶應義塾大学看護医療学部　教授）

アンケート集計結果

来場者数：52 名（ラボラトリメンバーを含む）
アンケート配布人数：34 名
アンケート回収人数：14 名

質問１：１．年齢（ｎ =14 人）

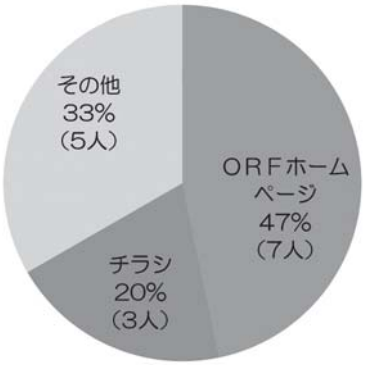


２．性別

女性 10 名　男性 4 名

３．職業

「その他」の具体的な記載：総合政策学部ＯＢ、会社員（医療・健康サービス）、慶応病院勤務



４．医療関係の仕事、学校ですか？

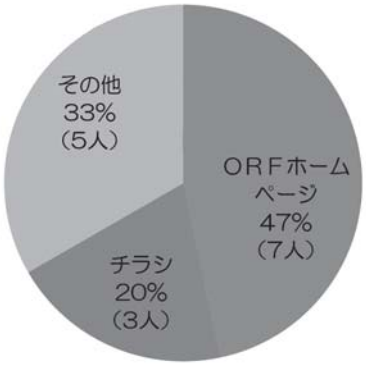
アンケート回収人数（14 名）全員が、「はい」と回答

５．ご家族等、身近にがんになった方がいらっしゃいますか？

いる　10 名　　いない　4 名

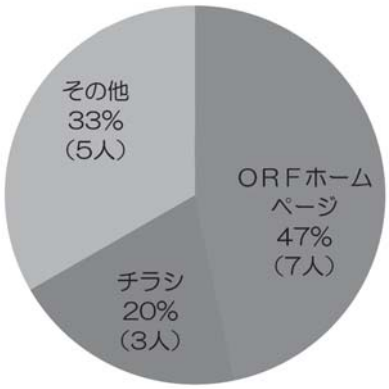
「いる」の具体的な記載：親が大腸がん、腎臓がん、膀胱がん、弟、伯母が肺がん、乳がん、父方の祖父が大腸がん、ホジキン病

質問２：本日の催しを何で知りましたか？（ｎ =14 人）



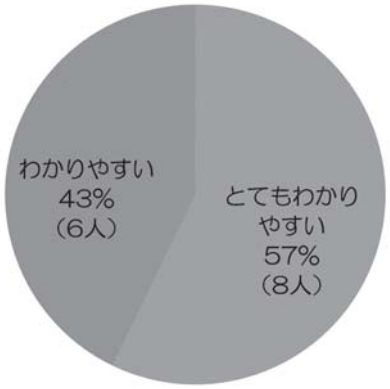
「その他」の具体的な記載：学校にて（看護医療学部）、ＯＲＦのパンフレット、Ｅメール、会場で、ＳＦＣサイト

質問３：参加された理由（複数回答）



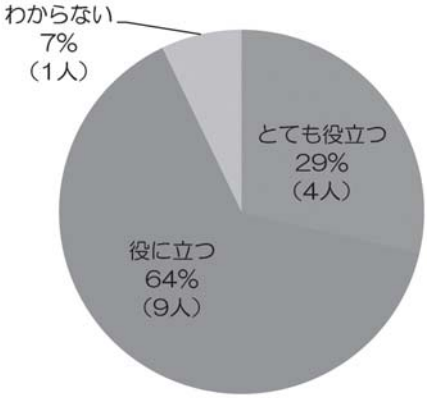
「その他」の具体的な記載：卒業生で大学から配信される事に興味があったから、ＯＲＦに来てみたかったから

質問４：本日の内容は、わかりやすいものでしたか？
（n=14）



質問５：本日の内容は、皆様に役立つものでしたか？

「わからない」と答えた方の自由記載：勉強にはなった



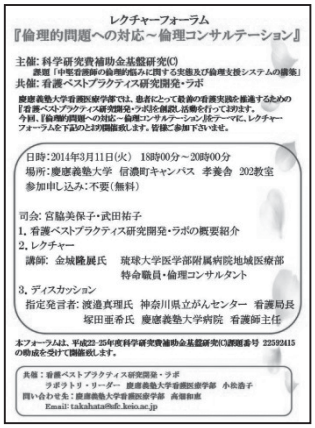
質問６：ご意見やご感想

・がん以外の他の病気との違いはあるのか（病気になるということはどんな疾患であってもショックを伴うものだと感じるので）ということに言及があるとよいと感じた。
・会場から意見がなければ、余った時間でパネリスト間でのディスカッションをするのもよいのでは？総合政策の発表に比べると看護の客は消極的だった。
・看護できない患者はいない（治らない患者はいても）という言葉を思い出す。今後の展開、広がりが楽しみなフォーラムだった。
・非常に興味深く聞くことができた。

第５回　レクチャーフォーラム『倫理的問題への対応～倫理コンサルテーション』

倫理コンサルタントの立場からレクチャー頂いてから、臨床で異なる立場のお二人から倫理的問題を提示頂き、それに対する金城先生からのコメントと、さらに会場の参加者を含めてディスカッションを行いました。倫理的問題を深く考える機会になりました。

なお、本フォーラムは、平成 22-25 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号　22592415　課題「中堅看護師の倫理的悩みに関する実態及び倫理支援システムの構築」の助成を受けて開催致しました。


レクチャーフォーラム
『倫理的問題への対応～倫理コンサルテーション』

主催: 科学研究費補助金基盤研究(C)
課題「中堅看護師の倫理的悩みに関する実態及び倫理支援システムの構築」
共催: 看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

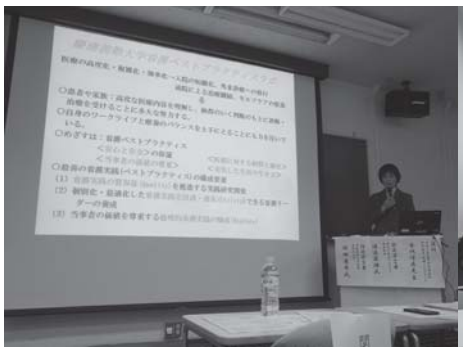
慶應義塾大学看護医療学部では、患者にとって最善の看護実践を推進するための『看護ベストプラクティス研究開発・ラボ』を創設し、活動を行っております。今回、『倫理的問題への対応～倫理コンサルテーション』をテーマに、レクチャーフォーラムを下記のとおり開催致します。皆様ご参加下さいませ。

日時:2014年3月11日(火)　18時00分～20時00分
場所:慶應義塾大学　信濃町キャンパス　孝養舎　202教室
参加申し込み:不要(無料)

司会: 宮脇美保子・武田祐子
1. 看護ベストプラクティス研究開発・ラボの概要紹介
2. レクチャー
講師:　金城隆展氏　琉球大学医学部附属病院地域医療部
特命職員・倫理コンサルタント
3. ディスカッション
指定発言者: 渡邉真理氏　神奈川県立がんセンター　看護局長
塚田亜希氏　慶應義塾大学病院　看護師主任

本フォーラムは、平成22-25年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 22592415の助成を受けて開催致します。

共催：看護ベストプラクティス研究開発・ラボ
ラボラトリ・リーダー　慶應義塾大学看護医療学部　小松浩子
問い合わせ先：慶應義塾大学看護医療学部　高畑和恵
Email: takahata@sfc.keio.ac.jp



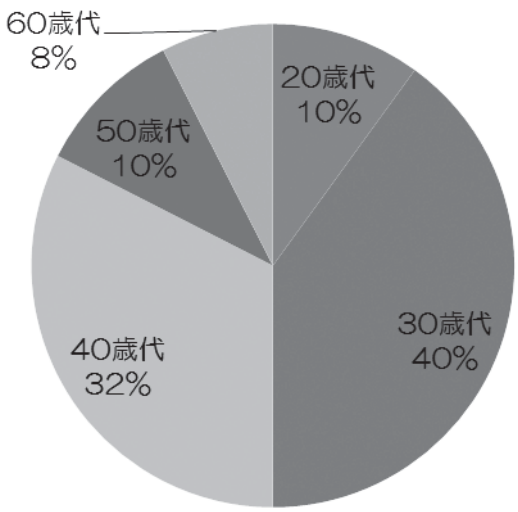
日時：2014 年 3 月 11 日 (火)　18 時 00 分～ 20 時００分
場所：慶應義塾大学信濃町キャンパス　孝養舎　202 教室
プログラム：
司会 : 宮脇美保子・武田祐子　慶應義塾大学看護医療学部教授
１．看護ベストプラクティス研究開発・ラボの概要紹介
　小松　浩子　ラボラトリ・リーダー、慶應義塾大学看護医療学部教授
２．レクチャー
　講師 :　金城隆展氏　琉球大学医学部附属病院地域医療部
　　特命職員・倫理コンサルタント
３．ディスカッション
　指定発言者 : 渡邉真理氏　神奈川県立がんセンター　看護局長
　　塚田亜希氏　慶應義塾大学病院　看護師主任

アンケート集計結果

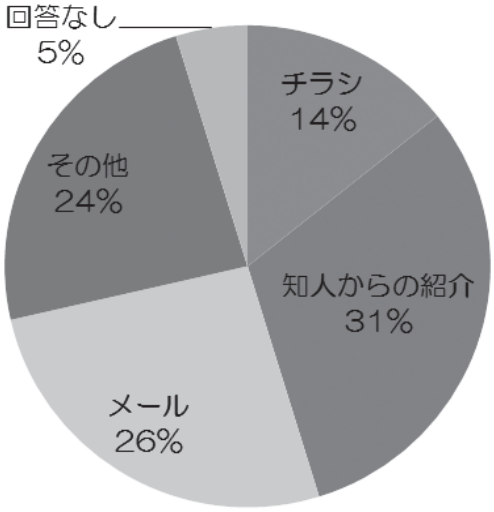
参加者数：　52 名

アンケート回収人数：　41 名

質問 1 ：年齢構成

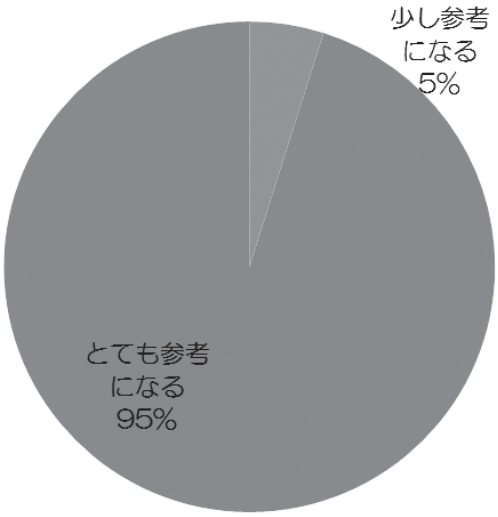


質問 4：本日のフォーラムを何で知りましたか？

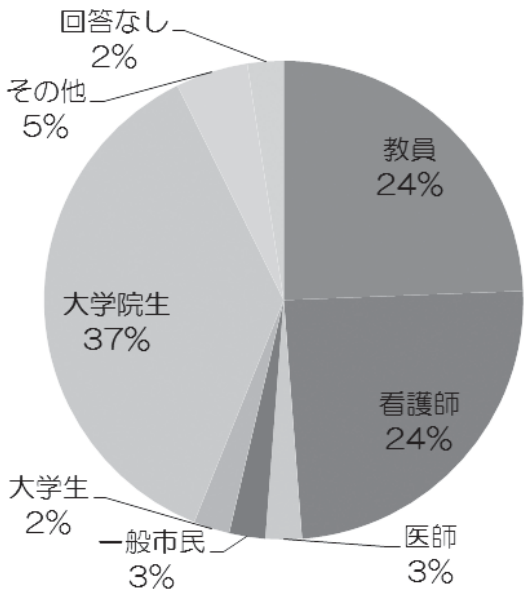


質問 2 ：性別　女性 33 名　　男性 8 名

質問 5:今回のフォーラムは、今後の参考になりましたか？



質問 3：職業



質問 6：今回のフォーラムに関する感想、ご意見をご自由にお書きください（一部抜粋）

・実際に現場で起きている事例を丁寧に説明して頂き、とても分かりやすかったです。

・結果よりも結果に至るプロセスをどれだけ丁寧に誠実に客観的に考えることができるか、できたかが大切なのだと改めて思いました。

・理論だけでなく、事例を分析（解説）して説明して下さったので、具体的でわかりやすかった。

・倫理コンサルテーションの必要性が非常にわかるようになった。

看護ベストプラクティス研究開発ラボラトリとは……

“最善の看護実践”を提供するための研究組織です。

医療の世界はいま、進化を繰り返しています。診断方法や治療技術の進歩により、医療はさらに充実したものとなりました。また、医療の効率化を目指し、患者やその家族へセルフケアを促進する動きもあります。しかし、患者が複雑化した医療の現状を把握し、正しい判断・ケアを行うのは難しいことです。看護ベストプラクティス研究開発ラボラトリでは、より満足度の高い看護実践を目指し、日々、研究しています。

ラボラトリが考える、ベストプラクティス・3大要素

1. 看護実践の質保証（Quality）を推進する実践研究開発
2. 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及（Utility）できる看護リーダーの養成
3. 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成（Explore）

そのために3つの研究グループで活動を行っています

看護実践の質保証研究部門

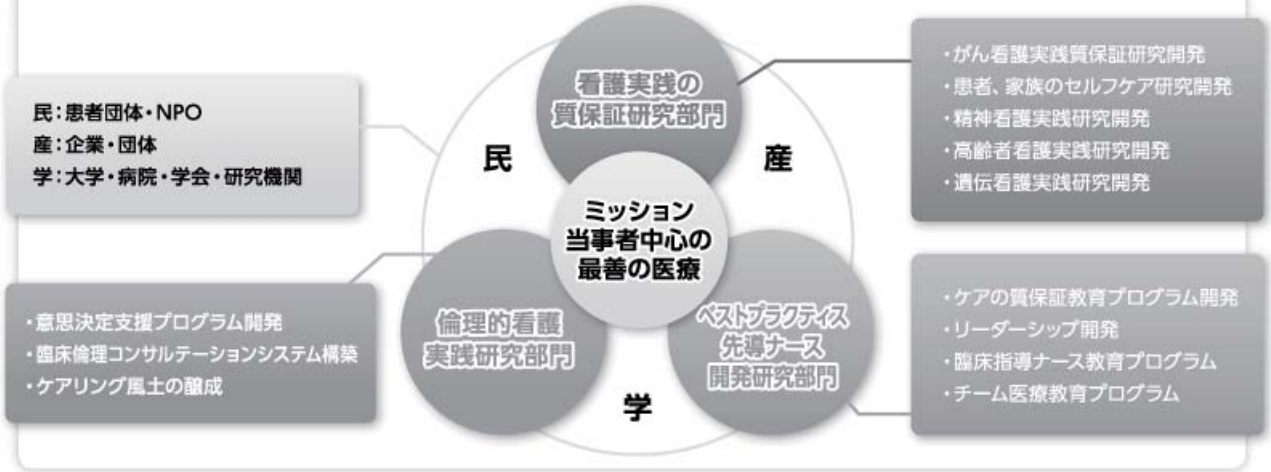
患者に安全と安心を保証し、納得した上で満足できる医療を受けていただくための看護を実践、促進していくために、最適なケアのエビデンス（根拠）を集め、標準化を行っています。

ベストプラクティス先導ナース開発研究部門

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及させることができるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、その養成に必要なキャリア開発プログラムを検討します。

倫理的看護実践研究部門

熟慮・納得のもとに事例を検討し、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題に対応し、臨床的コンサルテーションシステムの構築と実証をすすめます。



ラボラトリと考える、フォーラム・シンポジウム

「看護ベストプラクティス研究開発・ラボ」キックオフ・フォーラム

2012 年 4 月、「看護ベストプラクティス研究開発ラボ」の概要を紹介しました。さらに、各プロジェクトの紹介後にディスカッションを行い、本ラボラトリについて、様々な意見をいただきました。

シンポジウム「患者にとっての最善のケア」

看護師、患者、看護倫理専門家の立場から、「患者にとっての最善のケア」について発表していただきました。発表後のディスカッションでは、参加者の方と話すことができ、意見を深める良い機会となりました。

フォーラム「実践と研究をつないでベストプラクティスを創る」

看護ベストプラクティスの活動グループ、病院と看護医療学部の共同研究グループで、「ベストプラクティスを創る活動」について発表しました。また、参加者の方と、実践と研究をつなぐ重要性や課題について考えました。

ラボラトリメンバーリスト

太田喜久子、小松浩子、武田祐子、野末聖香、宮脇美保子、小畑智子、新藤悦子、茶園美香、森田夏実、藤井千枝子、福田紀子、中村幸代、朴順禮、石井美智子、稲見薫、関美佐、仙波美幸、高畑和憲、中尾真由美、平野量子、矢ヶ崎香